精神の保守主義へ

酒井隆之（文芸評論家　大阪国際大学講師）

偽善と喧噪と悪意の二十年

「見るべきほどのことは見つ」とは、壇ノ浦に散つた平知盛の最後の言葉だつた。

阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件に幕開けた戦後五十年目の年（一九九五年）、あの日から今日までの二十余年の劇的な世情の変化を思つての感慨である。マイクロソフトのウインドウズ９５がリリースされたあの頃、例へば「大東亜戦争」といふ言葉は、保守派を含め一般ジャーナリズムでは未だ禁忌に近かつた。また、憲法改正を口にし、或いは「侵略戦争」観に少しでも異議を唱へれば、大臣や議員はたちどころにその立場を危ふくした。

あれから二十余年、まさに出るべきものが全て出てしまつたかのやうな観がある。バブル崩壊、阪神大震災、一連のオウム事件、九・一一テロ、イラク戦争、小泉首相の訪朝、拉致や核問題、尖閣諸島への中国の欲望と一連の反日活動、民主党政権、東日本大震災と福島の原発事故。ＩＳ（イスラム国）の台頭、中露の露骨なヘゲモニー志向、欧州への難民流出、英国のＥＵ離脱、そしてトランプ米国新大統領の就任。

私たちは、内憂にあつては、あらゆる戦後的価値が空しく溶解し、機能不全となる、いや、それらが当初から偽善で形作られてゐたことをはつきりと認めねばならなかつた。そして外患に際しては、不信と不安の蠢く危ふく、殺伐とした流動流転の世界に自らが立たされてゐること、そして明確な「悪意」が我が国に向けられてゐることを自覚せねばならなくなつた。

特筆すべきは、それらの災害や事件だけではない。ウインドウズ９５以降のこの二十年こそが、グローバリズムといふ理念が化け物のやうな姿を現出させた時期だつたのである。

二十年前、グローバリズムなるものは、「マクドナル化」「マック・ワールド」などと俗流社会学で語られてゐた用語にすぎなかつた。

しかし、この二十年で、ＣＰの処理能力、ネットスピードの飛躍的向上、加へてＬＣＣ（格安航空）によつて、ヒト、モノ（情報）、カネの流動性が劇的に変化したのである。

インターネットの普及に伴ひ、ＳＮＳやＹＯＵＴＵＢＥ等のサービスがメディア的機能を果たし始める。どこでも、誰でも、どのやうな意見や情報でも発信可能といふサイバーデモクラシーの成立であり、スマートフォン等のモバイル機器の普及により、いかなる知力・財力・努力・能力といつた「資格」を問はれることなく、誰もが自前の「メディア」を手に入れることになつたのである。かつては幾分甘い、イデオロギー臭のあつた理念が現実化したとき、そこに立ち現れたのはインターコミュニケーションなる生易しいものではなく、露骨なる「本音」が放言される言語空間であり、偏見や誤解、憎悪から生じる衝突と諍ひを常態とする世界の現出であつた。

真摯に国を憂ひ、国の行く末を案じる者に、多大なる焦燥、慨嘆、憤怒、ストレスが避けられないことは言ふまでもない。

権勢に媚びず富貴に阿らず伝統の言葉づかひを

しかし、ここで厳しく省みるべきは、この二十年の目眩く世界の中で、保守派、或いは愛国者と自称する者たちの言論や行動が、焦燥と苛立ちのままに、次第に軽佻浮薄、大言壮語、或いは驕慢傲然たるものになりつつあるといふことである。

スピードと飽和、喧噪と衝突の中で危機意識が昂じるに従ひ、いつしか日本の歴史伝統を守るべき側が、国を傷つけ、国風を痛めるやうな言行を為してゐるとすれば、それは怖ろしい倒錯に他ならないのではないか。

かつて保守派は、イデオロギーに偏つた左翼的観念論に対し、常に質実冷静に（勿論リアリストの臭みはあつたが）、或いは柔和で品高い言論を為した。左翼に対する保守派の文化的優位性は、歴史への謙虚と伝統への慎みに支へられてゐた筈だ。我が国にあつては、学者よりも文人が保守思想を担ふことが多かつたことを改めて強調しておいてもよい。左翼のヒステリックな言行の前で、保守派は不動たる伝統の言葉づかひを守つた。反権力を謳ふ者たちの「隠微なる権力への意志」に対し、「権勢に媚びず、富貴に阿らず」といふのは、日本保守主義の風儀と言つてもよかつた。

しかし、「どこでも、いつでも」といふ喧しき時代に入り、私たちはいつしか、言葉や思想を時間の中で熟成させるゆとりを失ひ、性急な、荒れた、豪胆で粗雑な言葉を吐いてしまつてゐるのではないか。憎悪には憎悪で、警戒には警戒で、不信には不信で、ただ声のデカい者、慎まぬ者だけが跋扈する露骨な「彼らの世界の論理」にいつしか加担してしまつてゐるのではないか。焦りと嫉妬から生じる排他主義、不安と臆病に起因する自国優位主義といふ、世界の空虚なる「反動」に、追従してしまつてはゐないか。「そこまで言ふ」ことに喝采し、「ゴーマン」かますことに爽快な気分を味はひ、一方で、外国人観光客の称賛に鼻の穴を膨らませ、土産物屋的媚びの裏側で外国産粗悪品を嗤ふ。

いつの間にか、私たちこそが、「反日」「侮日」「反権力」の下卑た言行を模してしまつてはゐないか。捨てられんとする妾のやうな米国への拗けたルサンチマン、或いは、近代先進国の優等意識とアジア諸国への蔑みに起因する焦燥と苛立ち、現在の保守派の心性は矢張りどこか歪んでゐる。

世界は今、荒れ、乾き、喧しく、騒々しい。

よつて、喧しい他者の悪意へのリアクションとして吐かれる言論は、それがリアクション（反動）である限り、必ず他者との張り合ひに終始し、焦燥と苛立ちを慢性化させる。過激で、その場凌ぎの、目立ちたがり屋たちのバトル・ロイヤルが常態となるのだ。

だが、我が国の保守主義の真髄は、その時熟性にあつた筈だ。

自分たちが愛ほしんでやまないものを自身の暮らしの中に思ひ、また、自らが本来持してゐるものの尊さを歴史伝統の中に見出し、深切に言葉を紡いでいくこと。あらゆる国難にたじろぐことなき精神の保守主義が恃みとすべきは、その姿勢ひとつである。

平成29年1・2月合併号（241号）
（皇紀2676年）

新風

編集人　瀬戸　開
発行人　魚谷哲央
年間購読料＝2,000円

維新政党新風本部
〒604-0934 京都市中京区麸屋町通二条下ル
第2ふじビル4階
TEL.075-708-3700 FAX.075-708-3800
http://shimpu.jpn.org/
otayori@shimpu.jpn.org

新風驟雨（しんぷうしゅうう）

▼ＫＹ（危険予知）に関する四字熟語に曲突徙薪（キョクトツシシン）がある。▼火災を豫防するため、かまどの火の出口を外へまげそらせ、其邊にあるたきぎをも他へうつす。禍を未然に防ぐ喩。と大漢和辞典に出てゐる。▼辞典が引用する漢書『霍光傳（クワクコウデン）』では、アイロニーとして読める文脈にも置かれ、「曲突徙薪に恩澤なく」と語られる。▼このあとに続く「燋頭爛額爲上客（セウトウランガクハジヤウカクトナル）」も辞典に出てをり、火災を豫防する策を獻ずるものは賞せられず、失火に及んで頭をこがしひたひをただらせて救つた者は賞せらる。と書かれてゐる。現実はさもありなんとはいへ、こは異議が申し立てられる場面である。▼北宋の司馬光は、前述の語に「故未然之言常見棄忽及其已然又無所及（故に未然の言は常に棄忽され、其の已然に及ぶも、又及ぶ所無し。）」と付け足した。▼この未然之言云々のシナ語が国文法の未然形、已然形といふ用語に利用されたことは、学校で教はつた憶えが無い。著者が一冊も売れなくても構はぬと述べた『政治論集』に出てゐた。（久）

本紙目次

一頁…
● 精神の保守主義へ
二頁…
● 二十九年活動方針他